知的障害者による支援者評価に関する研究（2）

～ 回答の信憑性について ～

○川上雅司[1)] ・ 長壽厚志[1)] ・ 桑野良三[1)] ・ 狩谷明美[1)] ・ 池内 豊[1)] ・ 川本大輔[1)] ・ 池田 歩[2)] ・ 末光 茂[1)]

1）旭川荘総合研究所　2）社会福祉法人 旭川荘

KEY WORDS: 知的障害者・支援者評価・回答の信憑性

科研費 KAKENHI

課題番号 21K18472

■ 本研究について

・文部科学省科学研究助成事業から研究助成を受けている

・旭川荘倫理委員会の了承を得て実施している（承認番号：R3-004）

はじめに

➢われわれは、『知的障害者による支援者評価に関する研究（代表：長壽）』を進めている。　文部科学省科学研究費助成（課題番号 21K18472）

➢目的は、『知的障害者が支援者を評価する体制の構築』。

➢対象者は、社会福祉法人旭川荘に属する知的障害関係施設に入所または通所する 116 人。　（※12 施設／各 10 名ほどを無作為抽出）

➢対象者に『支援してもらいたい職員』と『支援してもらいたくない職員』を選定してもらう。選定された職員について支援者評価に関する全 24 問の質問（長壽ら作成）を行う。一ヶ月後、同じ対象者に、同じ手続きで２回目の調査を行うとい手続き。

※　この研究の実施概要は、「知的障害者による支援者評価に関する研究（1）

➢日本発達障害学会第 57 回研究大会（2022）で、この研究をテーマとした自主シンポジウムを開催。

✧「支援者はどのような声にしろ、知的障害者本人の声に真摯に耳を傾けなければならない」

✧一方で知的障害者本人の声の信憑性については明らかになっていない　※「信憑性」とは「信じられる度合」

目　的

『知的障害者による支援者評価に関する研究（代表：長壽）文部科学省科学研究費助成(21K18472)』で対象とした知的障害者の「職員選定」に着目し、調査 2 回の職員選定の一致状況、選定理由の了解性から回答の信憑性を検討する。

※選定⇒「支援してもらいたい職員」と「支援してもらいたくない職員」

倫理的配慮

➢対象者には研究内容、参加は自由意志であること、個人が特定されないことなどを書面・口頭で十分説明し、同意書に署名されることで同意が得られたとする。

➢説明内容の理解が困難な場合は、同様の説明により代理人から同意を得るようにした。

➢研究は旭川荘倫理委員会の承認を得ている（承認番号 R3004）。

方　法

1. 対　象　者

社会福祉法人旭川荘に属する知的障害関係施設に入所または通所する 116 人の知的障害者（男 68 人、女 48 人、平均年齢 46 歳）。

2. 実施手続き

① 対象者に『支援してもらいたい職員』と『支援してもらいたくない職員』をそれぞれ選定してもらい、その理由を問う。
※口頭での選定が困難な場合は、顔写真を示し選定してもらった。

② 選定された職員について、長壽らが作成した支援者評価に関する全 24 問の質問を口頭で行い回答を求める（表 1）。

③ 調査は、回答の再現性を確認するために、約 1 カ月の間隔を置き、同じ対象者に 2 回実施する。

④ 身近な支援者が対象者の適応行動を評価する（Vineland-Ⅱ適応行動尺度）。

【Vineland-Ⅱ適応行動尺度】

▶0歳0カ月～92歳11カ月の人の適応行動（個人的、または社会的充足に必要な日常活動の能力）を評価する検査

▶対象者の様子をよく知っている回答者（保護者や介護者など）に半構造化面接を行う

尺 度 構 成

領　域	下位領域
コミュニケーション	・受容言語
	・表出言語
	・読み書き
日常生活スキル	・身辺自立
	・家事
	・地域生活
社会性スキル	・地域生活
	・対人関係
	・遊びと余暇
運動スキル	・粗大運動
	・微細運動

⇨

適応水準評価（記述分類）

高い	
やや高い	
平均的	
やや低い	
低い	・軽度の障害
	・中等度の障害
	・重度の障害
	・最重度の障害

表 1．支援者評価に関する質問（一例）

質　　問	回　答
気持ちや言いたいことなど話を聞いてくれますか。	はい・いいえ・わからない
自分で決めれるようにしてくれますか。	はい・いいえ・わからない
困ったときどうすればいいか教えてくれますか。	はい・いいえ・わからない
わかりやすように紙などにかいて説明してしてくれますか。	はい・いいえ・わからない
他の人とのけんかやもめ事を助けてくれますか。	はい・いいえ・わからない
過ごしやすい環境 or 場所 or ところ）を用意してくれますか。	はい・いいえ・わからない
施設の外に出る機会や施設以外の人とかかわる機会がありますか。	はい・いいえ・わからない
良いと思える（個別支援計画 or くらしの計画 or 目標を書いたもの）を立てて or 作って）くれますか。	はい・いいえ・わからない
叩かれたり、蹴られたり体罰を受けることはありますか。	はい・いいえ・わからない
困っていても助けてくれないことはありますか。	はい・いいえ・わからない

3. 分 析 対 象

➢調査 2 回の職員選定の一致状況と選定理由の了解性を分析対象。

結　果

1．対象者の基本属性及び Vineland-Ⅱ適応行動尺度結果（表 2）

➢対象者：116 名（男 68 名・女 48 名）

➢平均年齢：46 歳（11 歳～81 歳）

➢療育手帳：

・A 判定（最重度・重度）・・59 人

・B 判定（中　度・軽度）・・56 人

・な　し・・・・・・・・・・・1 人

① 対象者の 9 割の人が全ての指標（コミュニケーション、日常生活、社会性、運動）で適応行動の発達水準が『低い』と評価された。

表 2．対象者 116 名の基本属性

(1) 性　別　男=68（58.6%）　女=48（41.4 %）

(2) 平均年齢　46歳（SD17.7 幅：11歳～81歳）／　男=43.6歳・女=49.4歳

(3) 療育手帳　A=59（50.9%）B=56（48.3%）無し=1（0.9%）

(4) Vineland-Ⅱ適応行動尺度結果（人）

		適応行動総合点	領域 コミュニケーション	日常生活スキル	社会性	運動スキル
低い	最重度※	94（82%）	87（75%）	68（59%）	9（8%）	64（56%）
	重　度※	10（9%）	17（15%）	27（23%）	47（41%）	14（12%）
	中　度※	5（4%）	2（2%）	11（10%）	46（40%）	9（8%）
	軽　度※	2（2%）	6（5%）	8（7%）	9（8%）	14（12%）
	やや低い	3（3%）	1（1%）	1（1%）	3（3%）	8（7%）
	平 均 的	0（0%）	2（2%）	0（0%）	1（1%）	5（4%）
	やや高い	0（0%）	0（0%）	0（0%）	0（0%）	0（0%）
	高　い	1（1%）	1（1%）	1（1%）	1（1%）	1（1%）
合　計		115※※	116	116	116	115※※

※　対象者の9割が全ての指標で適応行動水準が「低い」と評価されたので、Vineland-Ⅱ適応行動尺度のマニュアルに従い、この対象者の適応行動水準を障害の軽重度分類で配置した。

※※欠損値一名

1．対象者の基本属性及び Vineland-Ⅱ適応行動尺度結果（表 2）

➢対象者：116 名（男 68 名・女 48 名）

➢平均年齢：46 歳（11 歳～81 歳）

療育手帳：

A 判定（最重度・重度）・・59 人

B 判定（中　度・軽度）・・56 人

な　し・・・・・・・・・・・1 人

➢対象者の 9 割の人が全ての指標（コミュニケーション、日常生活、社会性、運動）で適応行動の発達水準が『低い』と評価された。

表 2．対象者 116 名の基本属性

(1) 性　別　男=68（58.6%）　女=48（41.4 %）

(2) 平均年齢　46歳（SD17.7 幅：11歳～81歳）／　男=43.6歳・女=49.4歳

(3) 療育手帳　A=59（50.9%）B=56（48.3%）無し=1（0.9%）

(4) Vineland-Ⅱ適応行動尺度結果（人）

		適応行動総合点	領域 コミュニケーション	日常生活スキル	社会性	運動スキル
低い	最重度※	94（82%）	87（75%）	68（59%）	9（8%）	64（56%）
	重　度※	10（9%）	17（15%）	27（23%）	47（41%）	14（12%）
	中　度※	5（4%）	2（2%）	11（10%）	46（40%）	9（8%）
	軽　度※	2（2%）	6（5%）	8（7%）	9（8%）	14（12%）
	やや低い	3（3%）	1（1%）	1（1%）	3（3%）	8（7%）
	平 均 的	0（0%）	2（2%）	0（0%）	1（1%）	5（4%）
	やや高い	0（0%）	0（0%）	0（0%）	0（0%）	0（0%）
	高　い	1（1%）	1（1%）	1（1%）	1（1%）	1（1%）
合　計		115※※	116	116	116	115※※

※　対象者の9割が全ての指標で適応行動水準が「低い」と評価されたので、Vineland-Ⅱ適応行動尺度のマニュアルに従い、この対象者の適応行動水準を障害の軽重度分類で配置した。

※※欠損値一名

2．調査別に見た職員選定状況及び選定理由の了解性

① 職員選定状況（表 3）

※ 両調査とも対象者の 8 割近くが『支援してもらいたい職員』を選定した。

※ 両調査とも対象者の 4 割近くが『支援してもらいたくない職員』を選定した。

※ 両調査とも、『支援してもらいたい職員』が『支援してもらいたくない職員』の約 2 倍多く選定された。

※『支援してもらいたい（もらいたくない）職員』と『回答の有無』に関連性があると言える（両調査とも $P<.001$）。

表 3．職員選定状況（人数）　n=116

【調査 1】	選定あり	選定なし	x^2値
支援してもらいたい職員	95（82%）	21（18%）	41.825※
支援してもらいたくない職員	47（41%）	69（59%）	
【調査 2】	選定あり	選定なし	x^2値
支援してもらいたい職員	84（72%）	31（27%）	29.351※
支援してもらいたくない職員	44（38%）	72（62%）	

※ $p<.001$

② 職員選定理由の了解性（表 4）

※ 職員選定した者の選定理由は、両調査とも『支援してもらいたい職員』で 5 割程度、『支援してもらいたくない職員』で 4 割程度が了解できるものであった。

※　支援してもらいたい職員を選定した者の約 4 割、支援してもらいたくない職員を選定した者の約 5 割が選定理由を述べられなかった。

⇒　理由の言語化は難しいが、感覚で職員の好悪を感じている可能性が考えられる。

※『支援してもらいたい（もらいたくない）職員』と『選定理由の了解性』に関連があるとは言えない。

表 4．職員選定理由の了解性（人数）

【調査 1】	選定理由の了解性 可能	不能	無回答	x^2値	P値
支援してもらいたい職員 n=95	46（48%）	12（13%）	37（39%）	0.486	=.784
支援してもらいたくない職員 n=47	20（43%）	6（13%）	21（45%）		
【調査 2】	選定理由の了解性 可能	不能	無回答	x^2値	P値
支援してもらいたい職員 n=84	49（58%）	6（7%）	29（35%）	4.507	=.105
支援してもらいたくない職員 n=44	17（39%）	5（11%）	22（50%）		

職員選定理由で多かったもの（一例）

支援してもらいたい職員	支援してもらいたくない職員
優しい	怒る
話を聞いてくれる	叱る
教えてくれる	怖い
よくしてくれる	

3．調査間の選定職員及び選定理由の了解性一致状況（表 5）

① 調査間で選定職員が一致

『支援してもらいたい職員』・・・・・・52 人/116 人（45%）

21 人（40%）が両調査とも選定理由が了解可能

『支援してもらいたくない職員』・・・・17 人/116 人（15%）

11 人（65%）が両調査とも選定理由が了解可能

⇒『支援してもらいたい職員』の選定で一貫した回答が得やすいが、対象者全体では一貫した回答は得にくいと思われる。

⇒一貫した職員選定を示す者の 4～6 割が了解可能な理由を述べる。

表 5．調査間の選定職員及び選定理由の了解性一致状況

	調査間での選定職員一致者数 n=116	選定理由の了解性一致状況 両調査とも了解可能	両調査とも了解不可能	両調査とも無回答	調査間で了解性不一致	x^2値	P値
支援してもらいたい職員	52（45%）	21（40%）	2（4%）	14（27%）	15（29%）	3.862	=0.277
支援してもらいたくない職員	17（15%）	11（65%）	0（0%）	4（24%）	2（12%）		

4．調査終了後の対象者の様子

調査後に「嫌いな職員がいないのに聞かれた～」と怒りながら施設に戻るなど、後に情緒不安定（泣く、怒る）になる対象者が数人観察された。

考　察

本研究では、知的障害者が示す回答の信憑性（信じられる度合）を、支援してもらいたい（もらいたくない）職員選定の調査 2 回での一致状況と選定理由の了解性から検討した。

1．「支援してもらいたい職員は？」といった、相手に対する肯定的な質問で、その内容や回答が分かりやすく明確なものであれば、次の可能性が示唆できる。

① 障害の程度に関わらず多くの知的障害者が職員選定できる。
② 職員選定できた半数ほどは了解できる理由も述べることができ、それは「支援してもらいたい職員」の選定で顕著となる。

2．「支援してもらいたくない職員は？」といった相手に対する否定的な質問は・・・

①彼らに与える心理的影響が強いよう。
②情緒不安定や回答への抵抗に繋がる恐れがある。
③十分な配慮が必要になると思われる。

3.1　調査 1 と調査 2 の選定職員の一致度は、「支援してもらいたい職員」で 45%、「支援してもらいたくない職員」で 15%であった。

3.2　調査別(各調査 116 人)で職員選定状況をみると、「支援してもらいたい職員」は調査 1 でも調査 2 でも約 8 割の者が職員を選定している。「支援してもらいたくない職員」は調査 1 でも調査 2 でも約 4 割の者が職員を選定している。そして、これらの者の 4 割程が了解可能な選定理由を述べた。

知的障害者が示す回答は、一貫性は保ちにくいが、その時の気持ちや状況に影響を受けた回答になりやすいのではないか。これは、その時、その瞬間の気持ちが彼らの主観的事実として回答に反映される可能性を示唆する。

今後の課題

※ 本研究で得た対象者の個人属性や適応行動水準（コミュニケーション、日常生活スキル、社会性スキル、運動スキル）が、職員選定の可否及び回答理由の了解性に何らかの影響をおよぼしているのかを明らかにする

まとめ

●本研究では、知的障害者が示す回答の信憑性（信じられる度合）を、支援してもらいたい（もらいたくない）職員選定の調査 2 回での一致状況と選定理由の了解性から検討した。

●「支援してもらいたい職員は？」といった、相手に対する肯定的な質問で、その内容や回答が分かりやすく明確なものであれば、障害の程度に関わらず多くの知的障害者が職員選定でき、その半数ほどは了解できる理由も述べることができ、それは「支援してもらいたい職員」の選定で顕著であった。

●「支援してもらいたくない職員は？」といった相手に対する否定的な質問は、彼らに与える心理的影響が強く、情緒不安定や回答への抵抗に繋がる恐れがあり、十分な配慮が必要になると思われた。

●知的障害者が示す回答は、一貫性は保ちにくいが、その時の気持ちや状況に影響を受けた回答になりやすいと思われた。これは、その時、その瞬間の気持ちが彼らの主観的事実として回答に反映される可能性を示唆すると思われた。